

おもしろ悲しいトビのこと

里草会顧問 福井正樹

村の人達は珍しい生きものを捕えると、よく学校に持ってきた。孵ったばかりのキジの雛だったり、親にはぐれた狸の子供だったり、羽を傷めて飛べない白サギだったりするが、間もなく死んだり逃げてしまったりする。それでも学校のゴミ捨て場の庇の下に、生き物を入れるための小屋や檻などが置いてあった。

そこに晩春の頃、誰かが巣から落ちていたトビの雛を持ってきて小屋に入れた。手を入れてつかもうとすると鋭いくちばしでつかれる。この時代はどの家庭でも鶏を飼っていたので、トビの雛も同じように扱おうとした。鶏なら両手でつかんだり、横抱きにして胸の餌袋をなげてやるとおとなしく抱かれている。しかしトビの子は猛々しく暴れてくちばしで突くので、鶏のように手を出して捕まえることはできなかった。

小さなカエルなどを金網の間からさしこむと、素早く鋭い爪でつかみ、丸呑みしたりくちばしで引き裂いて食べる。男の子たちは面白がって田の溝などからカエルやドジョウを捕ってきて、適当にほりこんでいた。女の子たちは残酷に食いちぎる様子を嫌がりながら、怖いもの見たさで後ろの方から覗いている。

昼休みなど小屋の前に人だかりができ、捕まえたカエルやドジョウなどを食べる様子を見て騒いでいると、お尻を急に外に向けていきなり水鉄砲のように糞を飛ばす。一番前に陣取っていたガキ大将のズボンに灰色っぽい臭い糞が当たって垂れてくると更にみんながはやし立てた。トビの子は巣を汚さないために外に糞を飛ばしてしまう習性があるので、巣の下は生臭いにおいがしている。

貪欲に何匹ものカエルをつかんで引き裂いている残酷さも、猛禽の片りんをうかがわせる面白さがあった。ゆったりと空を舞っているトビの様子からは想像もできない素早い反応と身のこなし方で、あのトビにそんな生態があることを初めて知った。登校する時に途中でカエルを捕まえて持ってきてトビに与える。昼休みも学校の周辺でドジョウなどを取って来る。帰りにも何人かが覗きこんで餌を与えていた。朝早くから下校の時まで、トビの小屋の前には何人かが集まって歓声をあげていた。

ある時に檻から出しても飛んで逃げてゆかないことがわかった。昼休みなどは子供達が校庭の両側に分かれて、それぞれとってきたカエルを見せてトビを誘う。トビは見せびらかされたカエルを目指して駆けるように低く羽ばたいて、獲物をわしづかみにして食いちぎり呑み込む。まさに鷃呑みにするのだから早い。

それを見計らって反対側の子供が獲物を見せて誘う。校庭の端から端に飛んで行くのだがまだあまり飛び上れなくて、駆けつけるような感じだった。最初の頃は下校時に小屋に餌を入れてトビを閉じ込めて帰っていたが、そのうち校庭の松の枝などに止まって夜を過ごすようになった。

トビは日に日に上手に羽ばたくようになり、飛び方が上達していった。赤ガエルを好み、

泥色をした土ガエルなどはあまり好きでないようだった。腹いっぱいの際は校庭の松の枝で休んでいるが、昼前などになると教室に飛び込んできて廊下などを飛び回る。授業どころではなくなって皆で窓の外に追い散らす騒ぎになった。

そのうち村の子供たちが登校する前に集合する場所まで飛んでくるようになった。田植などが終わった後は日が長い。朝の食事は家族が一緒に早いのだが、大人が野良でひと仕事終わってもまだ登校せずに遊んでいる時もある。トビも朝が早く明るくなるので待ちかねたのであろう。村まで学校のトビが来ると手分けして餌を捕まえて与えた。トビが来た村の子供たちは得意になってトビに先導されながら学校に向かう。神武天皇を金色のトビが先導したように、子供達よりちょっと先の木の枝などに止まって眺めている。

しょっちゅう田の畦を駆けまわってカエルなどを捕まえていると、だんだん少なくなったのか捕まえにくい。なぜか同じ村に来るのではなく、学校の向かいの村に来た次の日は一転して北の村に飛んでくる。トビの方が子供たちを識別しているのだろうか。よく見分けられないほど遠くの高い木の枝に止まっても、餌をかざすと一直線に飛んでくるので子供たちを喜ばせた。

しかし夏休みになると子供たちは登校しなくなる。それぞれお手伝いに畑に連れて行かれる子もいればあちこちの山田の水の状態を見に行かされるものもいる。登校前に集合する場所にも誰もいない。みんなトビのことなど忘れてしまっていた。

夏休みにはそれぞれの村ごとに水遊びをする場所があって、昼食後集まって泳いだり魚を追っかけたりする。大人は昼寝をしている。たまに網などをもって魚を獲りに来る人があると、子供たちは魚の追い出し役などをしてついて廻る。アユなどはくれないが、そのほかの雑魚等は子供の自由にさせてくれた。それを笹などにえらぶたを刺して、小さな子に持たせていた。

そんなとき突然トビがその魚をつかもうと急降下し、翼で羽ばたかれた子は驚いて泣き騒ぐ。トビは魚をつかんで木の上に舞い上がり、悠々と食べている。何匹もトビは見かけられるのだが、どれが学校のトビなのか見た目では分からない。トビから獲物を守るために棒を持った子が見張っていなければならない。

あちこちの村で被害が相次いだ。丹後から取れたてのいわしをオート三輪などの荷台いっぱい積んで村を廻って売りさばきに来る時がある。それぞれバケツ一杯くらい買って、はらわたを出し開いてむしろなどに並べ夏の陽に当てて乾燥している。そんなものをトビはどん欲にさらってゆくのだった。

小さいころからずっと子供たちが採って与えてくれる餌を、自分の食べ物と思って育ててきている。夏休みになってからは、トビも自然から餌を取ってはいたとは思いますが、人が持っているものも自分の餌の対象だと思ってしまう。自然の生き物を狩猟することと、人のものを奪うことの区別がつかないのだろう。鶏の解体中を襲ったりして、大人達からも憎まれるようになった。夏休みが終わって登校すると、西の方の村で干し魚を捕りに来たのを、網で捉えられて殺されたということだった。